



昭和34年7月(1959)、大洪水で浸かる原町交差点付近。高瀬川の上流から牛が流れてくるなど、大変な災害だった。

原町交差点そばにある当時の南郷村役場。現在は診療所として活用している趣のある建物。



日本を代表する兄弟画家、 中村研一・琢二生家美術館。

従軍画家として有名な兄研一氏と、紺綬褒章を受章した弟琢二の立派な生家を改装した美術館。絵画のみならず、日記や書簡、愛用品なども展示されている。戦争画を描いていた研一氏の作品は、戦争を知る人が減ってきた今、戦争の記憶を次代に繋いでいく上で改めて注目されているそうだ。

Nango

南郷

Theme 共在

About 南郷地区は光岡、原町、野坂、宮田、曲、後曲、東旭ヶ丘、朝野、朝町、昼掛、王丸、大穂、大穂町と広い校区であり、田畑、山林も多く含む農業が盛んな地域。

宗像市の南部の広い範囲に位置し、国道三号線が左右に走る。南側と西側に広く山脈に囲まれ、若宮市や福津市に抜けることが出来る。この地域は農家が多く、釣川支流の朝町川、高瀬川を主な水源に、田んぼや様々な野菜、果樹を栽培している。郷愁を感じる雰囲気が広く残る地域。

再開発が進む光岡交差点付近とその周囲。背後には許斐山。



南郷地区は国道3号線からひとつ入ると、ノスタルジックな畦道などが多く残る景色が広がる。写真は宮田区から許斐山を臨む。



提供:南郷地区コミュニティ・センター



江戸時代末期の絵図面。初期の頃と比べ原町、光岡ともに家屋が増えているのがわかる。(絵図面:中村研一・中村琢二生家美術館提供)



江戸時代初期頃の光岡側の絵図面によると原町には5軒、光岡にも8軒ほどしか家がなかった。



原町と福間を繋いでいた唐津街道を走る定期バス。旧有吉医院前にて。



宗像で三号線が開通したのが昭和40年頃、当時を知る中村館長は当初、通る車も少ない大きな道をなんで作ったのだろう、と思ったそうだ。唐津街道が栄えていて、移動は徒歩か馬、車も少し通るくらい。あの頃はみんなが車に乗る時代になるとは思っても見なかったのだろう。今回の取材では昔を知る人が高齢であつたり、亡くなられていたりして語り部の顕著な減少と、さらにはコロナ渦ということもあり、情報収集の難しさを感じた。田畑を開拓し、街道や国道が作られ、地域が発展して活気が出るなかで、知らず識らず失われていくものもある。何を未来へと紡いでいくのか、皆さんも唐津街道原町や光岡付近の商業地域を訪れた際はそんなことも少し感じてもらいたい。

失われていくもの、
未来に紡いでいくもの

かつて、現在では商業が盛んで昼夜問わず常に多くの人や車の往来がある。そしてこの地域は今さらに現在、再開発が行われている。そこを少し南下すると唐津街道原町がある。家屋が密集した街道で、三号線が出来るまでこちらが交通の要だった。しかし、その街道も江戸時代初期頃はまだ5軒しか民家がなかったそうで、人もまばらで栄えてはいなかった。このころから隣村の光岡では近隣地域の農家の次男などを入百姓として迎え入れ、土地を田畑として開拓していった。と、原町の中村研一・琢二生家美術館の中村館長は昔の絵地図を紹介しながら教えてくれた。その後、江戸末期には民家も増え、原町も栄えだしたことが絵地図からわかる。

屋夜間わない車の往来と、
田んぼ広がる郷愁の景色。

本紙を読んでいるほとんどの人が国道三号線を何らかに利用したことがあるだろう。この南郷地区を跨る三号線は宗像でも飲食店や商業施設が集積している。そこからひとつ道を外れると途端に田んぼが広がり、その真ん中に大きな筒が集めたような建物、カントリーエレベーターがそびえ立つ。この景色は市民のみならず、市外の人々にとっても宗像の田舎らしさを象徴するものではないだろうか。いまでもこそ当たり前に広がる景色だが、三号線がまだなかった時代、この付近はどんな地域だったのだろうか。

入百姓による開拓、
そして街となる

三号線の光岡交差点付近は平成6年まで田んぼしかなかったが、現在では商業が盛んで昼夜問わず常に多くの人や車の往来がある。そしてこの地域は今さらに現在、再開発が行われている。そこを少し南下すると唐津街道原町がある。家屋が密集した街道で、三号線が出来るまでこちらが交通の要だった。しかし、その街道も江戸時代初期頃はまだ5軒しか民家がなかったそうで、人もまばらで栄えてはいなかった。このころから隣村の光岡では近隣地域の農家の次男などを入百姓として迎え入れ、土地を田畑として開拓していった。と、原町の中村研一・琢二生家美術館の中村館長は昔の絵地図を紹介しながら教えてくれた。その後、江戸末期には民家も増え、原町も栄えだしたことが絵地図からわかる。